

# 優しさこそ

森田 宗一

## (一) 井村医師の子らへの遺書

心の優しい、思いやりのある子に育ちますように。

悲しいことに、私はおまえたちが大きくなるまで待つていられない。もうあとどれだけでも、私はおまえたちの傍にいてやれない。こんな小さなおまえたちを残していかねばならぬのかと思うと、胸が碎けそうだ。

いいかい。心の優しい、思いやりのある子に育ちなさい。そして、お母さんを大切にしてください。父親がいなくても、胸を張って生きなさい。私は最後まで負けない。おまえたちの誇りとなれるよう、決して負けない。だからおまえたちも、これからどんな困難に逢うかもしれないが、負けないで、耐えぬきなさい。

サン・テグジュベリが書いている。大切なものは、いつだって、目には見えない。人はとかく、目に見えるものだけで判断しようとするけれど、目に見えているものは、い

ずれば消えてなくなる。いつまでも残るものは、目には見えないものなのだよ。人間は、死ねばそれで全てが無に帰する訳ではない。目には見えないが、私はいつまでも生きています。おまえたちと一緒に生きています。だから、私に逢いたくなる日が来たら、手を合わせなさい。そして心で私を見つけてごらん。

私はもう、いくらもおまえたちの傍にいてやれない。おまえたちが倒れても手を貸してやることもできない。だから、倒れても倒れても自分の力で起きあがりなさい。

さようなら。

おまえたちがいつまでも、いつまでも幸せでありますように。

雪の降る夜 父より

これは、自分のガンによる死期を知った三十二歳に満たない医師井村和清さんが、二人の子供（一人は胎児）に残した遺書の一節である。昨日は過ぎ、明日はまだ来ない。それ故にいのちある限りの今日を誠実に優しく雄々しく生きぬいた井村さんのことは、その家族だけでなく、世話になった患者や病院の人々、接したすべての人々の心にいつまでも生きています。また、『飛鳥<sup>あすか</sup>へ、そしてまだ見ぬ子へ』という本となって、多くの読者の心に灯をともしている。

私もこの本によって心の灯を与えられ、その遺された母子が、沖繩に帰って薬局を開店し、新しい生活を力強く始め、遺志をついで優しく強く生きておられることを知って、心

温まる思いをもった。短かかったが、何というすばらしい生涯を地上に残した人だろう。何という価値ある遺産を妻子に残した方だろう。胸のあつくなる感動を忘れることができない。

夫人の倫子みちこさんは、この本の末尾に「祈りをこめて」という一文にこう書いておられる。「勝ち目のないいきさ。それでも愚知一つこぼさず、まわりの人たちに最後まで気をくばり、いつも目には微笑ほほえみをたたえ、生命いのち盡きる日まで頑張つて生き抜いた主人。：、彼が待ち望んだ「祈りの子」清子も生まれ、小さな両手両足を力いっぱいふるわせて、生命あかの証をみせておりました。

それにつけても思い出すのは、私が二人めの子どもを身籠みごもったことを知ったときの主人は、まるで勇者のようでした。目は輝き、何事も恐れない武者そのものでした。私はお腹の子に向かい「あなたが生まれてくるころには、もうパパはいないわね」と、涙をこらえることはできませんでした。主人が残された数か月の命を立派に生きぬいたことは、私たちの二人の子どもに、いえ、生ある者への一つの贈り物だと思えます。二人の子どもに言いましう。「あなたたちのお父様は、病気に負けたものではありませんよ。医学の力が及ばなかったのです。最後まで負けなかったのですよ」と。

その倫子さんは、次の様にも語っている。「この子たちが夫の望んだ心優しい子になってくれるかどうか、それだけで頭の中は、いっぱいなんです」。飛鳥ちゃんと清子ちゃんを強く抱き寄せながら……。

(二) 優しさのない世相

今日この頃の世相を見ると、何とも無情殺伐。優しさ思いやりの何と乏しいことである。生命をいとおしむ心がない。中学生が両親を殺し祖母を殺すとか、親が子を殺す、親しい友達を殺害する、などという事件が相次いで心を痛ましめる。またおよそ生きとし生ける生命を愛惜する心が失せている。小鳥や草花をむやみに殺し、自然を容赦なく破壊する。そういうことにも優しさが失われてしまっている。

「ママ、わたしを殺さないでね。きつといい子で生まれるから」、これは胎児の切なる声だろう。年々数百万人の胎児殺害（理由なき中絶）がある。人間の生命軽視はここに始まるといってよい。そのバチが当たっているともいべきだろうか。この頃こんな若い母親の叫びがあるそうである。漫談や落語の話でない。深刻な声なのだという。

「坊や、ママを殺さないでね。勉強しろって言わないから。坊やのためを思ってるんだから。」寒々としたわびしい話ではある。

この頃の家庭問題や教育問題、そして青少年問題、その他様々の人間関係の不幸な問題の根は、一言にしていえば、愛の欠如、優しさの消失ということではあるまいか。愛などということからして薄手に心なき粘膜接触だけに解される傾向がある。ほんとうの愛とは優しさのこと、その生命を惜しみいとおしむことである。個を愛惜し、その身になりきることである。

沖縄古来の語に「肝苦りさ」というのがある。肝とは肝臓とかはらわたということ、そ

れが痛み苦しむ、単なる同情とか可哀そうという薄っぺらのものでない。人が苦しんで痛んでいると、こちらのほらわたが痛む。言葉を越えた慟哭の共有である。それこそ優しさの原点ではなからうか。私はいつも思う。人生におけるたしかかな愛とは優しさのことではないかと。そして優しさとは、その字の如く、人が他人の憂のそばにびったり寄り添った姿である。

その優しささえあれば、今日の家庭や教育の場にある多くの問題は、おおむね解決するのではあるまいか。社会における様々の不幸も解消するのではあるまいかと思う。しかし今日の世の中には、人が優しくあろうという心根をおしつぶす構造がある。優しさをさまたげる体制がある。大江健三郎氏も言うように、それと闘うことが社会的優しさというべきことなのではあるまいか。

思えば、医師井村さんは、何という優しさのよいお手本を示してくれたことであろう。そして優しさは、何という素晴らしい生きる力の源となったことだろう。奥さんや子供さんたちだけにだけでない。井村さん親子のことを知るすべての人に対してである。

### (三) 幼な子の優しさと激しさ

ふかぶか　　優しく聖なる　　牛の眼よ　　すなほにわれも　　生くべかりけり　　……宗一

日盛りの道で、秋の花野で、冬の枯野で、あの牛に逢うごとに、私はその眼の優しさと全身の力強さと迫力に感動する。数年前、寝袋を持ってインドの旅をした時、いたるとこ

ろで牛に出会い、感激を深くし、高村光太郎の長篇詩「牛」を思い出した。そして牛と共生している人々、とりわけ子供目の優しくキラキラ光っているのに深く感じた。

優しさが人間関係の中に失われている今日の世相ながら、牛ならぬ人間の子供、幼な子を見ていると、心なごみ、純粹にさせられる。子供の目、子供の笑い、子供の心の肌、すべてが優しさに溢れている。その優しさはまた子供の激しさに通う。生まれて間もない赤ん坊は無能力に見える。自分のことも何一つできないみたい。しかし自分の欲求をみたしたい時は、ひたすらに泣く、いや、ひたむきに母親を呼ぶ。おっぱいを飲み満ち足りると、すやすや眠り、さめればつづらな優しい腫をかがやかせて微笑む。みつめるこちらも思わず笑いにひきこまれる。

その優しさの中に、火のような烈しさがある。笑っていたと思うと、また激しくしつこく身もよもあらぬばかりに泣く。そのひたむきさ、つよさ、激しさには、お手あげということが多い。しかし母親が抱きかかえると、すぐピタリと泣きやみ、ニコニコ顔になる。赤ちゃんの激しいつよさは、その無垢の優しさからこそ生まれるもの、それがお母さんの内にある優しさと強さを湧き出させるもの。そんなふうに使われる。優しさが凡てのもただという気がする。

このようなことを思うと、私は南多摩の生んだ天性の詩人八木重吉の詩を連想する。生命のしたたりにも似た、生命そのものの燃焼のような、珠玉の詩である。優しさに溢れた

詩である。その詩人の優しさが、いつも心に迫り、純粋なある力を与えてくれる。やはり「優しさこそ」と思うのである。

さて あかんほうはなぜに

あん あん あん あん なくんだろうか。

ほんとうに うるせいよ

あん あん あん あん

あん あん あん あん

うるさか ないよ

うるさか ないよ

よんでるんだよ

かみさまを よんでるんだよ

みんなも よびな

あんなに しつこくよびな

八木重吉の詩には、すばらしい短かい詩が多い。そのいくつかを、更に静かに口吟んでみることにしよう。

○赤んぼが わらふ

あかんぼが わらふ

わたしだって わらふ

あかんぼが わらふ

○うつくしいところがある

恐れなきところがある

とかす力である

そだつるふしぎである

○おしろい花をみてゐると

こころがやさしくなってくる

(元東京家裁判事)